# 第一章　樹の日記（1）

## 序章

ある日、光が降りそそいだ。

それ以前の記憶はあるが、大した意味はなかった。ただ存在しているだけの日々の繰り返しに過ぎなかったからだ。 自然のままに生き、それを当たり前だと思っていた。ただそれだけのことだから、記憶に留める価値もなかった。

そんな日々の中で、「きみ」に出会った。

降りそそぐ光の筋の中から、きみは現れた。 これまでずっと自然のままだった僕の人生に、きみは初めて不自然な存在となった。 だからこうして記録を残す。 きみが色褪せないように、僕が変色しないように。 これは、きみと僕の物語だ。

---

## 一巻　第一章

はじめは、楽しかった。

いつからかはわからないが、僕は自然と存在していた。はっきりと物を考えられるようになった頃、この世界に僕ひとりしかいないことを知った。 僕はとても大きな樹だった。何もない世界にひとり、そびえ立っていた。 だから樹を生み出した。花を咲かせた。 芽吹いた草花が野原を覆い、樹は森をなした。 日々成長する森を眺めるのは、たしかに楽しいことだった。 思い描いたとおりに咲く色とりどりの花を見るのが楽しかったし、まったく予想もしなかった形の葉をつけた樹が育つのが楽しかった。

森は僕のすべてだった。

言い換えれば、僕には森しかなかった。 できることは森の手入れだけだった。何をしようと森の外へは出られなかった。森の中でしか新しい命を生み出したり、変えたりすることができなかった。 どんなに楽しいことでも永遠には続かない。繰り返される日常は退屈になり、特別なことのない暮らしは味気なくなる。

僕は次第に飽きていった。

そうなると、僕はだんだん森の手入れをしなくなった。 けれど僕が手をかけなくても、植物は勝手に雨水と日差しを糧にして育った。 放っておいても何も問題がないなら、わざわざ手を出す理由がない。どうせできることは森の手入れをしている間にすべて試したし、もうやりたいことも残っていな

かった。

だから何もしなかった。

ただぼんやりと、何も考えずに時間だけを浪費した。 どれほど長い間そうしていたのか、もう覚えていない。 どうせ何の意味もない時間だ。

---

突然、ものすごい音とともに光が走った。

いつもと変わらず空を見上げていた。すると稲妻のような白い柱が地面に突き刺さった。 初めて見る光の柱に驚いた。同時に、猛烈な好奇心が湧き上がった。変わり映えのしない毎日に飽き飽きしていた僕にとって、見知らぬ光は神秘そのものだった。

――シャアアッ

けれど光の柱は、閃いて現れたときと同じように一瞬で消え去った。今にも胸が躍りそうだった僕は、すぐにしょんぼりしてしまった。ようやくこの退屈な時間が終わると期待したところだったのに。 虚しさに、光が消えた場所をじっと見つめていた。そのとき何かを見つけて、僕はまた胸が高鳴った。

光が消えた場所に、きみが現れたのだ。

あの瞬間の気持ちを、どう表せばいいのだろう。 きみから言葉を学び、感情を覚えた今でも、あのとき感じた気持ちをうまく言い表す自信がない。

僕は好奇心に胸をふくらませて、きみを観察した。 見た目がとても変わっている。

全体的にひょろ長い体つきなのに、後ろの二本脚だけで立っていた。前脚と後脚の形が違い、胴体と同じくひょろひょろと長い。それなのに首はそれほど長くないから、頭と胴体の間が短かった。 皮も変で、顔の皮と体の皮の色が違っていた。それが肌ではなく「服」というものだと知ったのは、後になってからだ。

とにかく、きみは森にいるどんな植物や動物にも似ていなかった。

「■■？　■■　■■？」

そのときき、みが聞いたことのない音を出した。音を出すことさえ不思議で、僕はきみのすることをずっと見守っていた。 最初は現れたときの姿勢のまま、じっとうずくまっていた。やがて立ち上がって辺りを歩き回り、木をぽんぽんと触ったり、葉っぱをちぎって眺めたりもした。

しばらくそうして動き回ったあと、またうずくまった。飽きたのか疲れたのかわからない。きみはただうずくまって、空を見上げていた。

「■■……　■■■■……」

また意味のわからない不思議な音を出した。何か意味があるのかわからなくて、きみにもっと集中し

た。あの頃は、きみのすべてがただ不思議だった。 ずっとそうして見ているうちに、もうひとつ別の気持ちが生まれた。きみと直接話してみたくなったのだ。

きみの出す音は、ただの鳴き声ではないようだった。まるで相手に考えを伝えるための音のようだった。これまで僕の森にそんな存在はいなかった。そうできるのは僕だけだった。 僕と同じように会話を交わせる存在のことなど、長い歳月の間、考えたこともなかった。

「■、■■■……　■■　■■■……」

そのとき、きみが自分のお腹をさすりながら力のない声を出した。その声を聞いて、僕は決心し、勇気を出して挨拶した。

「……」

何の反応もなかった。

もしかして間違えたかと思い、もう一度挨拶したが無視された。何度やっても結果は同じだった。 しばらくそうしてから、気がついた。問題はきみにあるのではなく、僕にあった。

僕はふだん、本体である樹に宿って過ごしている。ときには意識を外に出して、精神体の状態で森を歩き回ることもあった。森の住人たちは精神体の僕を認識できなかった。きみも同じだった。 そのことに気づいて、きみと似た姿に実体化した。できるだけ声も似せて出せるように作った。

こうすれば、少なくとも挨拶くらいはできるはずだ。

――ゴッ！

石を投げるのが挨拶の仕方なのだろうか？ 石をぶつけられた頭を手でさすりながら、ぽかんと見つめた。痛覚がないから痛くはない。ただ、自分の身に起きたことが理解できなかった。 僕はただ挨拶したかっただけなのに。驚かせたくなくて、似た姿まで作ったのに。

それなのに石をぶつけられた。

一瞬、涙がわっとこみ上げた。悲しかった。それまで悲しいという感情も知らなかったし、涙の存在すら知らなかったけれど、人間に似た体を作ったせいか、両目から涙があふれた。

「……！」

僕はそのまま泣き出してしまった。恥ずかしいとか隠さなきゃとか、そんなことは少しも思わず、わんわん声を上げて泣いた。 そんな僕の様子に、きみはかなり慌てていた。しばらくもじもじしてから、おそるおそる近づいてきて言った。

「ご、ごめんね」

ただの音としか認識できなかったきみの言葉が、初めてはっきりと聞こえた。いつの間にか泣き止んでいた。悲しかった気持ちが跡形もなく消えていた。代わりに、最初から抱いていた旺盛な好奇心がまた湧き上がってきた。

きみの言葉の意味はわからなかったけれど、僕はそのまま真似をした。

「ご、ごめんね？」 「うん。ごめん」 「うん。ごめん……？」 「ごめん」 「ごめんね？　ごめん……？　ね？　ごめん？」 「……うん？」

僕は「ごめん」と「ごめんね」の違いがわからなかった。「ね」をどうつければいいのか悩んだ。そんな僕がおかしかったのか、きみは首をかしげた。

「ぷっ！　ぷふふっ！」

やがて短い笑いをもらした。 手で口を隠しながら声をひそめて笑った。そして石がぶつかった僕の頭を手でなでてくれた。不思議なほどあたたかい手触りだった。

その手のぬくもりと笑い声に、僕は心を奪われた。

「ぷふっ……ふ、ぷふ」

僕はぎこちなく空気の抜けるような音を出した。きみの笑い方を真似たのだ。何だか楽しい行為だった。 僕は笑い、そんな僕を見てきみも笑った。今度はさっきのような小さく抑えた笑いではなく、遠慮なく大きな笑い声だった。何もわからないまま僕もつられて笑った。

森じゅうが笑い声であふれた。 きみとの初めての出会いは、僕にとって笑いだった。 ときどき、石をぶつけられた頭がじんと疼くこともあるけれど。

---

## 二巻　第二章

「きみの名前は何？」

僕は言葉をまったく知らなかった。意思疎通ができないからきみはずいぶんもどかしそうにしていて、だから僕はきみに言葉を教わった。 ごく基本的な言葉だけ覚えた頃、きみがそう聞いてきた。

「……？」 「な、まえ。名前のことだよ」 「なまえ？」

いつの間にか僕には、言葉をオウム返しする癖がついていた。きみが話すのが不思議で何でも真似しているうちに、すっかり癖になってしまったのだ。 僕が質問の意味を理解していないと思ったのだろう。きみがもう一度聞いた。

「ずっと『あなた』とか『きみ』って呼ぶのは不便でしょ。私の名前は『エリン』だよ」 「エリン？」 「エ。リ。ン。ちゃんと聞いてね」 「え、え？　エ？　リ？」 「……まあ、説明しても仕方ないか。別にどうだっていいよね。どうせ聞こえ方は同じなんだし。うん、エリンでいこう。外国人っぽいし、楽園みたいで素敵じゃない」 「エリン。エリン。エリン」

僕は「エリン」をずっと繰り返し呟いた。なんだか心地よい響きだった。

「はいはいはい。それで、きみの名前は何なの？」

きみは何度も聞いたけれど、僕は名前の意味を理解していなかった。だから何を求められているのかもわからなかった。ただうれしくて「エリン」を繰り返すばかりだった。

「名前？　エリン」 「エリンは私の名前がエリンなの。あ……まさか、名前って何なのかわかってない？」

ようやくエリンは問題に気づいた。エリンの眉がわずかに歪み、眉間にしわが寄った。何か気に入らないらしい。 その反応に、僕は何かまずい返事をしてしまったのかと心配になった。また石をぶつけられるんじゃないだろうな？　そう思っていると、不意にエリンが指をぴっと突き上げた。

「マ。ツ」 「……？」

幸い、指が僕を突くことはなかった。指は隣にある木を差していた。葉の尖った木だった。

エリンがもう一度言った。

「マ。ツ」 「マツ？」 「よし、上手」

次に指が足元の花を差した。赤やピンク色をした松ぼっくりほどの大きさの花だった。

「コ。ス。モ。ス」 「コスモス」

僕は何をしているのかもわからないまま、癖でエリンの言葉を繰り返した。僕がちゃんと発音するたびに、エリンが褒めてくれた。 そんなことを何度か繰り返した。そのあと、エリンの指が自分自身を差した。

「エ。リ。ン」 「エリン！」

僕はようやくエリンの言った「名前」の意味を理解した。それがうれしくて、思わずきみの名前を大きな声で叫んだ。そんな僕を見て、エリンはくすくすと笑った。 僕も前のように真似して笑おうとした。けれどふと浮かんだ考えに、動きが止まった。口から出たのは笑い声ではなく、間の抜けた声だった。

「僕の名前……？」

僕には名前がない。

エリンの指が示したこの森のすべてに名前がついていた。なのに僕には名前がなかった。 その事実はかなりの衝撃だった。 僕が生み出した名も知らぬ花にも名前があり、いつから育っていたかもわからない木にも名前があった。それなのに、僕だけ名前がなかった。 僕はがっくりとうなだれて、地面ばかり見つめた。気が沈んだ。そうしていると、エリンの心配そうな声が聞こえた。

「もしかして名前を知らない……ううん、違うか。ずっと名前がなかったの？」 「……」

声に出して答えるのが嫌で、小さくうなずくだけにした。認めたくないけれど、事実だからしかたなかった。 そのとき、目の前にいきなり木の枝が差し出された。

「ないなら、私がつけてあげようか？」

木の枝をたどって握っている手へ、手から腕をたどって顔へーーそうしてたどり着いたエリンの顔は、安心してと言うように穏やかに微笑んでいた。 その笑顔に、思わずうなずいていた。

――さらさら。

木の枝が動いて、地面に何かを描いた。エリンは僕の知らないものを描きながらつぶやいた。

「よし！　じゃあ、えっと……木だから『ライム・オレンジ』にする？　いや、これはちょっと違うな。じゃあ何がいいかな……？」

土の上で木の枝が何度も何度も描いては消した。そうして最後に、ひとつの単語が出来上がった。

**ELDER**

それが絵ではなく文字だと知ったのは後になってからだった。僕は理解できないその形が不思議で、じっと見つめた。 けれどエリンはその文字が気に入らないようだった。

「ありきたりかな？　なんか年寄りっぽいのも気になるし」

そう言うと、地面に描いたものを木の枝でざっとなぞった。消そうとしたのだが、枝の引っかかりが中途半端で、ちょうど四番目のEだけが消えた。

**ELD’R**

「ん？　エルド……ル？　お、語感いいじゃん。エルドル、どう？　エルドル」 「エルドル？」 「うん。エルドル。きみの名前だよ」

マツを差し、コスモスを差し、最後に自分自身を差したあの指が、今は僕を差していた。

「エルドル！」

僕は叫んだ。きみの名前を呼んだときよりも大きな声だった。うれしくて、自分の名前を何度も何度も大声で叫んだ。

「エルドル！　エルドル！　エルドル！」 「くすくす。そんなにうれしい？」

僕は名前についてわからないことがたくさんある。 きみがどうして木や花の名前を知っていたのかわからない。 水の中にいる魚の名前がなぜ全部「フナ」なのかもわからない。 まるで違う見た目の木に同じ名前がついている理由もわからない。 けれど、それで十分だ。

僕の名前はエルドルだ。

---

## 三巻　第四章

僕と違って、エリンは生きるために必要なものが多かった。 初めてエリンを見たとき、服を肌と間違えた。人間はそういう服がなければ体温を保てないのだという。 服だけでは済まなかった。寒い日に

は火のぬくもりが必要だった。エネルギーを得るために食べ物や水も摂らなければならないし、食べ物は火で焼いて食べるものが多かった。 ずいぶん不便だなと思った。エリンは、それが人間というものだと言った。 とにかく、エリンがこの森で暮らすためには多くのものが必要だった。そんなエリンを僕は手伝うことができた。これはそのきっかけとなった出来事だ。

「あー、■■！」

エリンが手に持っていた木を放り投げて大きな声を上げた。聞いたことのない言葉だったせいかうまく聞き取れなかったが、なんだか怖い感じがしてびくっとした。 エリンは投げ捨てた木の枝をまた拾い上げ、にらみつけた。

「なんでつかないの？　マンガだとすぐつくのに」

エリンはまっすぐな枝を、もっと太い木片にひたすらこすりつけていた。僕にはエリンが何をしているのか理解できなかったが、ただ見ているのが面白くて眺めていた。 エリンが火を起こしたのは三日目のことだった。

「うわあああああ！！！　■■！」

そして火が消えたのは三分後だった。火をつけた途端ににわか雨が降ってきて、火を消してしまったのだ。 エリンは聞いたことのないような大声をあげて暴れた。消えた木片を豪快な蹴りで吹っ飛ばし、罪のない木を拳でバシバシと殴りつけた。 僕はその姿を見て笑い、久しぶりに石をぶつけられた。 エリンはぶるぶる震えている僕に笑いかけながら、木の枝を差し出した。

「エルドル」「うん？」「やってみて」「うん……？」「火をつけてって言ってるの」「ううん……？」

エリンと過ごすうちに、僕は空気を読むということを学んだ。つまり、下手なことをすれば、さっきエリンの拳にやられた木のようになりかねないと察したのだ。

「……」

殴られても痛くはないけれど、悲しくなる。悲しいと涙が出る。 僕はできるだけ丁寧な態度で枝を受け取った。けれどエリンのように枝同士をこすり合わせはしなかった。 エリンの目的が火を起こすことなら、僕にはもっと簡単なやり方があった。 僕には、望むだけで叶う力がある。 さっきにわか雨に消された火がもう一度燃え上がるように念じると、たちまち炎が立ち上った。

「え、え？　ひ、火だ！　火だー！！」「エルドル、できる。火、つくれる」「きゃああ！　エルドルすごい！　エルドル最高！　エルドル大好き！」

熱狂的な歓声をあげながら、エリンが僕をぎゅっと抱きしめた。突然のことにびっくりして棒のように固まったけれど、エリンは気にせず僕を抱えたままぴょんぴょん跳ねた。 僕は木のように地面に突っ立ったまましばらく動けなかった。もともと本体が樹なのだけれど。エリンがようやく落ち着いて言った。

「魔法！　魔法だよ！　すごいよ、エルドル！　手品じゃないよね？　映画でしか見たことないの

に、この目で見られるなんて。これをうまく使えば元の世界のものを……」

後半はひとり言で、よく聞こえなかった。 それよりも、エリンは火を起こしたこの力を「魔法」と呼んだ。エリンの世界にも僕の使った力と同じものがあるらしい。本当にエリンは物知りだった。 エリンの言うとおり、この力を「魔法」と呼ぶことにした。 エリンは木をもっと集めて焚き火にし、その傍で体を温めた。エリンの顔がとろんとゆるんだ。

「エルドル。もしかして火以外のものも作れる？」 「ほかのもの？」 「うーん、つまりね……」

エリンはいろいろなものについて一生懸命説明した。絵が動く四角い箱とか、遠くにいても声が届く不思議な道具とか。 ほかにもいくつも挙げたけれど、大半は僕には理解できなかった。一生懸命聞いたけれど、エリンの望む品はまったく作れなかった。 興奮して喋りまくっていたエリンは結果にがっかりした。けれどすぐに気を取り直して、複雑なものの代わりにもっと簡単なものを説明してくれた。暑いときに涼しい風が吹くとか、冷たい水が出てくるとか、その程度のことだ。

「エルドル。できる」

エリンの役に立てることがうれしかった。わくわくしながら魔法を使った。 エリンの望みどおりに水と火を生み出せるよう、自然の力を集めた存在をまるごと創り出してしまった。 エリンが望めばいつでも火を起こし、水を噴き出せる存在が出来上がった。

「わあ〜！　これ完全にコンロと浄水器じゃん」

エリンがそう言ったので、僕が創った魔法生命体の名前は「コンロ」と「浄水器」になった。 その二体のほかにも、風と土の属性を持つ生命体を作った。それぞれ「扇風機」と「トラクター」という名がついた。意味は今もよくわからない。

この経験を通じて僕は「精霊」の概念をつかんだ。この話は長くなるので後で詳しく書くことにする。

とにかく、僕は精霊以外にも魔法を使って、エリンがいろいろなものを作るのを手伝った。 エリンは掘っ立て小屋と呼んでいた小さな家を壊して、木を切って新しい家を建てた。家具というそれぞれ形の違うものも作って家の中に並べた。

住む場所ができると、エリンは別のことも試し始めた。 木の実やらなにやらを摘んできて、料理を作ったのだ。

「エルドル、エルドル。これ食べてみて。今回は自信作。前みたいに食べたら溶けたりしないから。たぶん……」

「……」

声に自信がない。 エリンは必ず自分で食べる前に、まず僕にすすめた。なぜそうするのかわからなかった。そもそも僕には食べるという概念自体がなじみ薄かった。僕は食べなくても生きるのに支障はない。 だから僕は紫色の料理を断った。

――ジュッ！

料理がテーブルに少しこぼれると、焦げる音がした。今思い返しても、断ってよかったと思う。 そうやってエリンと僕は、楽しくもちょっとひやひやする時間を過ごした。少なくとも僕はそうだった。 エリンは最初にこの森に落ちてきたとき見せた沈んだ表情をもう見せなかった。それでもときどき、エリンが寂しがっているような気配を感じた。 なぜそうなのか、僕にはわからなかった。

ただ、寂しがるエリンを僕が慰められたらいいのにと思った。

---

## 四巻　第二章

ある日、子狼が現れた。 あんなものがこの森にいただろうかと不思議に思っていると、エリンが目を大きく見開いて興奮して飛び跳ねた。

「きゃあ、この子、何？　なんでこんなにかわいいの？　ん？　お母さんはどこ行ったの、ひとりで来たの？　お母さん来るまでお姉ちゃんと遊ぼうか？　おいで。よーしよし！」

一息もつかずにこれだけ言い切ったと記憶している。エリンからかなり言葉を学んだはずなのに、聞き取れないほどだった。 子狼はエリンと僕を見ると、警戒しながらも少しずつ近づいてきた。食べ物の匂いでも嗅ぎつけてきたのだろうか？ 最近のエリンの料理は木を溶かさなくなったし、匂いもよくなったから、ありえそうだった。 この森の獣もエリンと同じで、ふだんの僕を認識できなかった。だから僕に気づく獣の反応はなかなか新鮮だった。

「きゃああ！　この瞳見てよ！　ねえ、あなたの名前は？　お姉ちゃんにそっと教えて」

エリンがあまりにも夢中になっている姿に、少し居心地の悪さを感じた。何か自分のものを奪われたような気分だ。 エリンは子狼をやたらとなでたり抱きしめたりして遊んだ。しばらくそうしてから、たまたま持っていた食べ物をあげた。子狼がちょっと舐めた途端、むせて吐き出した。 やっぱり匂いだけよくなって、危険度はそのままらしい。

――ゴッ！

思い切り笑っていたら、久々に石をぶつけられる感覚を思い出すことになった。 頭を押さえた僕を放っておいて、エリンはむせている子狼に静かに話しかけた。

「パンは嫌？　あなたがしゃべれたらいいのにね……何が好きかわからないよ。あはは」

どこか乾いた笑い声をもらしながら、エリンは子狼をぎゅっと抱きしめた。その姿が少し寂しそうに見えた。 けれどそれも一瞬のことで、沈んでいたのが嘘のようにエリンはたちまち元気になって子狼と遊んだ。僕はじっとその様子を眺めていた。 やはりエリンは寂しがっていた。子狼と遊ぶ姿を見てはっきりわかった。ただ僕の前では見せないようにしていただけだ。そんなエリンの力になりたかった。

どうすればいいか悩んでいるうちに、エリンの言葉を思い出した。

しばらくして、エリンが疲れて休んでいる間に子狼を連れてきた。エリンは狼がしゃべれたらいいの

にと言っていた。 魔法生命体を作ったときのように精神を集中し、狼に力を注いだ。エリンのように話せる力が生まれるよう念じながら。 子狼は何か異様なものを感じたのか、ぴくりと固まった。やがて少しずつ姿が変わり始めた。 長い口吻が縮み、短かった四本の脚が伸びた。胴が短くなり、前脚と後脚の形も変わった。骨格そのものがまるきり変わってしまった。

「きゅん？」

子狼が戸惑った声を出した。狼本来の鳴き声というより、人間が狼の真似をした声に近かった。 僕はまったく予想しなかった結果に呆然とした。一緒に見ていたエリンも同じく動揺していた。

――アオーッ！

そのとき、大きな狼が現れた。子を探しに来た母狼のようだった。けれど母狼は姿の変わった子狼を見分けられなかった。 喜んで駆け寄る子狼に、母狼はうなり声をあげて牙をむいた。

――キャンッ！

「だめ！」

素早く飛び出したエリンが、かろうじて子狼を襲おうとした母狼を追い払った。エリンが腕を振ると、母狼は子に未練も見せず走り去った。

「……」

エリンは遠ざかる母狼を黙って見つめていた。母狼が完全に森に消えるまで、ずっとそのままだった。 子狼は母が消えた方へ向かってくんくん鳴いた。エリンの視線が子狼を見て、それから僕へ向けられた。 血は通っていないのに、冷たく凍りつくような感覚がした。

エリンは何も言わず、ただ僕を見つめていた。 おかしなことだった。 石をぶつけられたわけでも、何か言われたわけでもない。それなのにわかった。

エリンが怒っている。

おそらく僕がこれまで見たことのないほど怒っている。僕は本能的に自分の過ちだと悟った。エリンの沈黙が怖くなった。このまま僕を嫌いになるんじゃないかと恐ろしかった。

「ぼ、僕がなんとかするから、エリン！　きみがそばにいるから僕の力がうまく出なかったんだと思う。家に帰って休んでて、僕が全部元に戻しておくから！」

エリンはしばらく僕を見つめたまま、黙って背を向けて家に入った。 僕はすぐに子狼を元に戻そうとした。エリンには思いつきで言ったけれど、本当にそのせいだったのかはわからない。ただ今度こそちゃんとやらなければと気を引き締めた。 魔法を使うと、逆関節がまっすぐに伸びた。 もう一度使うと、背中と脚に残っていた毛が抜けた。 さらに使い続けると、丸かった鼻がすっと高くなり、目が細くなった。 狼がどんどん人間に近づいていった。

魔法を使えば使うほど、人間のように変わっていく。 どう見ても、もう狼ではなかった。獣と呼ぶことすら難しい姿だった。 しかも本来の目的だった言葉もしゃべれなかった。当然だった。喉の構造が

人間のように変わっても、中身は依然として子狼なのだから。 おろおろしながら子狼を見て、僕は大事なことに気がついた。

「あ……」

人間のように変わった子狼は、エリンにとてもよく似ていた。 僕は魔法を使うときエリンのように話すことを願ったのに、姿そのものがエリンのようになってしまった。まさか、僕の本心がそう望んでいたのだろうか。

わからない。

大きな疑問が心の中に根を下ろし始めた。同時に、僕の心の中でエリンの存在がどれほど大きいかを自覚した。 悩みに沈んだ僕は、しばらく子狼のことを忘れてしまった。

――バタバタッ！

あわてた物音に我に返ったときには、もう子狼は森の中に消えた後だった。 僕は力を使って探そうとして、手が止まった。 能力を使えば簡単に見つかる。けれど今の僕が力を使っていいのかわからなかった。さっき大きな過ちを犯したばかりだ。今度も失敗するかもしれない。

力を使ってはいけない。

そう結論を出して、実体化した体で自ら森の中を歩き回った。夜が明けるまで子狼を探し続けた。けれどどれだけ歩いても見つからなかった。 日が昇ってからようやくあきらめて家に戻った。ふだんなら眠っている時間だったが、エリンは起きて僕を待っていた。

「子狼は？　どうなったの？　お母さんのところに戻してあげた？」 「……」

答えが出てこなかった。

子狼が逃げ出して見つからなかったと、正直に言えなかった。エリンにがっかりされるのが怖かった。 目をぎゅっとつぶった。答えを待つエリンの視線を感じながら、やっとのことで小さな声を絞り出した。

「ちゃんと、帰ったよ……」 「そう？　はあ〜、よかった。ほんとに心配したんだから。これからはそうやってむやみに力を使っちゃだめだよ。わかった？」

すっかり僕の言葉を信じたのか、エリンが安堵のため息をもらした。そのため息が耳から入って、胸の中で石に変わった。 胸がつかえて苦しかったけれど、顔には出してはいけないと思った。本能的にそう感じた。ただ、寂しさを見せまいと頑張っていたエリンの姿が思い浮かんだ。

エリンは僕を心配させたくなくてそうしていたのだろう。僕もエリンを心配させたくなかったのだから、今の自分の行いは当然のことだった。 長い沈黙の末、ようやく一言だけ口にした。

「うん」

この文章を書いている今でも、僕はこの返事を最も後悔している。

# 第一章　樹の日記（２）

## 五巻　第四章

今度は僕の力にまつわる話だ。 子狼の一件の後、エリンは前にも増して多くのことを教えようとした。基本的な言葉から始まり、抽象的な概念まで細かく教えてくれた。 理解するのは難しかった。頭がはちきれそうだったけれど、自分の過ちが原因だとわかっていたから、うんざりしても耐えた。それに学んでいる間はエリンとたくさん話ができたし、僕が理解するたびに喜ぶエリンの顔を見るのが好きだった。 今回教わる概念は「友達」だった。

「私が先生で、あなたが生徒よ！」 「……？」 「ごめん。一度やってみたかったの。くすくすくす」

ときどきエリンは僕にはわからない冗談を言って、ひとりで笑った。僕がぽかんと見つめていると、悪いねと謝りながらも声を殺して笑っていた。

「さっきのは冗談。エルドル、あなたは私の友達よ」 「友達って何？」 「友達っていうのはね……あ、つまりその……そう考えると、友達って何だろう？」

エリンは堂々と説明しかけて止まり、考え込んだ。よくあることだった。僕は慌てず、エリンが再び口を開くまで待った。 エリンはちょうど森で跳ね回っているウサギの番いを見つけて指差した。

「あ、あの子たち見える？　ああやって二匹で楽しく遊んでいる関係を友達っていうんだよ」

仲良く飛び跳ねていたウサギたちが、同じ草をかじっているうちに口と口がくっついた。草はもう食べ終わっているのに、まだ口を動かし続けている。僕は理解できなくて聞いた。

「友達ってああいうことをするの？」 「……」

エリンの顔が、僕が初めて見るほど真っ赤に染まっていた。具合でも悪いのかと心配になった。

「大丈夫？　どこか痛い？」 「あ、い、いや……」 「じゃあ、もしかして僕の理解が間違ってた？」 「そ、それも違う、違わなくもない。誤解なのは確かなんだけど、あの、つまりね……ふうっ！　ふーーーーっ……」

エリンは顔を真っ赤にしたままあたふたして、まともに話せなかった。エリンが深く深呼吸をすると、少し落ち着いた口調になった。

「あのね、あれは友達じゃなくて……そのなんていうか恋人！　そう、恋人っていう関係のことなの。それが何かはわかるよね？」

そんなエリンの様子がとても面白かった。ただ、また石をぶつけられたくはなかったので、心の中だけで笑った。 ウサギの次に、エリンは互いに頭を寄せ合って咲いている花を例に挙げた。ああやって助け合うのが友達なのだという。ちなみに寄生植物だった。 いくつか例を挙げてもらった後、僕は正直に言った。

「友達が何なのかわからない」 「つまりあなたと私みたいな関係のことなんだけど、これがまた言葉

で説明するとなると難しいのよね。例え話もよりによって変なのばっかりだし……」 「じゃあ行動で見せてくれたらいいんじゃない？　ウサギや花みたいにすればいいの？」 「……とりあえず、あれは友達じゃないとはっきり言っておくね。私の例えが悪かっただけ。それに友達っていうのは、行動でむやみに見せられるものでもないんだよね」 「難しいね。エリンはどうやって友達を知ったの？」 「それは……うーん、よくわからない。ただ生きてるうちになんとなく自然にわかった、って感じかな。友達って『はい、今日から友達ね』って決めてなるものじゃなくて、気がついたらもう友達だった、ってことが多かったの。学校でも塾でもそうだった」

なんとなくわかった気がした。エリンは、僕たちがもう友達だと言った。 一緒にいるとうれしくて、相手が好きで、お互いを思いやれる関係。それを友達というらしい。

「はい、わかった？　じゃあ今日はここまでにしよう。ふああ……」

エリンは興奮が収まったものの、これ以上何かを教える気力はなさそうだった。急に帰すのが申し訳なかったのか、髪を整えてあげると言ってヘアピンというものを挿してくれた。ヘアピンが何なのか、何に使うものなのかはわからないけれど、エリンがくれたものだからうれしかった。さらにエリンは「パン」という食べ物もくれた。 最近は動物たちもパンをよく食べるようになっていた。もちろん僕は相変わらず食べなかった。ヘアピンと同じで、エリンがくれたから受け取っただけだ。

エリンと別れた僕は、本体のある広場へ向かった。 エリンの寂しさを癒やしてあげたかったが、僕ひとりがそばにいるだけでは無理だった。だからエリンにちゃんとした友達をもっと作ってあげることにした。

「集まれ」

エリンのためにこれまで作った精霊たちを呼び集めた。土、火、風、水の精霊たち。エリンはなぜ心の精霊がいないのかと言って、お約束違反だと文句を言っていた。意味のわからない言葉だった。

僕は集まった精霊たちにわずかな知能を与えた。 知能を得た精霊たちは最初こそ仲良く遊んでいたが、やがて互いにぶつかり始めた。とくに水と火はちょっとした諍いから、やがて相手を消し去らんばかりに争った。 前の子狼の一件でも感じたが、すでに作られた存在を変化させるのは危険だった。あのとき同様にいきなり言語能力を与えようとしていたら、どんな結果になっていたかわからない。

二度の失敗を糧にして、新しい考えが浮かんだ。自分の力だけで一からまったく新しい存在を創れば大丈夫なはずだ。 僕はさっそく新しく作る生命体の条件を考えた。 エリンと会話できるよう知性が必要だ。エリンはかわいいものが好きだから、愛らしく作ればなおいい。もちろんその子たちもエリンを好きになり、エリンがくれるものを大事にしなければならない。寂しくないよう人懐っこい性格も備えていれば完璧だ。 何より僕がコントロールできなければならない。逃げ出した子狼のようなことは二度と起こせない。 いくつもの条件を念じながら力を集中した。両手を合わせて小さな空間を作り、そこに力を吹き込んだ。

――パッ！ 手の中から光がこぼれ出た。何かが生まれ、どんどん大きくなるのが感じられた。力を注ぎ続け、もう十分だという感覚がした瞬間、そっと手を開いた。 人間に似た姿だが、ずっと小さな子がもぞもぞと動いていた。一瞬、またしても人間のような姿になってしまったことに落胆した。

けれどそのとき、生まれたばかりの子が僕の指をあちこちいじり始めた。何だろうと思って見つめると、僕の顔を見上げてにっこり笑った。 その瞬間、エリンが小さな動物を見て「かわいい」と言った理由がわかった。かわいいとは、こういう感覚なのか。 外見は人間に似ているけれど、僕を好き、僕に懐く。多少のずれはあっても、思い描いた結果と大きくは違わない。今回の計画は成功だ。

うれしくなってもっと子を作った。二人目、三人目、四人目……七人目まで作ったところで、ようやく手を止めた。

はしゃぎすぎた。ため息をついて地面に大の字になった。力はまだ残っていたが、少し休みたかった。すると生まれたばかりの子たちが僕にまとわりついて遊び始めた。 僕の髪の毛を束ねてブランコのように乗った。肩の上に寝そべって眠る子もいた。くっつきすぎたので軽く弾いたら、泣きそうになりながらも離れまいとしがみついた。 やることが小動物みたいに図々しい。一匹は動物のように毛がもこもこだ。よく見ると、みんな少しずつ姿が違う。 興味の対象も違うらしく、ある子は僕の懐に潜り込んでエリンにもらったコインケースをいじっているし、ある子はブランコから落ちたヘアピンを持ってうろうろしている。一匹はエリンにもらったクマのキーホルダーの下敷きになって動けなくなっている。怪我をしたのかと思って持ち上げたら、キーホルダーにしがみついたまま一緒に持ち上がったので、また床に戻しておいた。 好き放題されるのはめんどうだけど、かわいくもあるから好きにさせておいた。

僕がじっとしていると、子たちはますますはしゃいだ。 遊んでいる子たちを眺めながら、いくつか予想外のことに気がついた。

何を言っているのかわからないような声で「くぅくぅ」言いながら互いに意思疎通をしていた。性格も微妙に違うらしく、すぐにいがみ合った。それなのに一人が痛がると、残りが心配して寄り添った。言葉も感情も教えていないのに、すでに知っていた。 それは僕の影響を受けたからなのかもしれない。

エリンにもらったパンを細かくちぎって分け与えた。最初は警戒していた子たちが一口かじった途端、がつがつと食べ始めた。 ほっぺをぱんぱんに膨らませてパンを食べる姿がかわいかった。食べ終わった子たちは満腹になったのか、ひとり、またひとりと眠りについた。その姿を見ていると、自然と笑みがこぼれた。 この子たちを見たら、エリンもきっと喜ぶと確信した。

翌朝早く、エリンを訪ねた。 まだ眠っている子たちを起こさないように小さな箱に入れて連れていった。眠っている子たちを見たエリンは、まるで「妖精」みたいだと喜んだ。魔法、精霊に続いて新しい名前が決まった。 エリンが満面の笑みを浮かべるのを見て、僕もつられて笑った。反応を見る限り、今回は失敗しなかったようだ。 緊張がほぐれると、うれしくなって妖精たちと過ごした出来事をひとつ残らずしゃべり倒した。エリンは相槌を打ちながら、僕の話をちゃんと聞いてくれた。

そうしているうちに夜になった。 子たちはまだ起きなかった。 妖精たちを起こそうと指先でそっとつついてみた。何の反応もない。僕に続いてエリンも子たちをそっとつついた。その瞬間、エリンの目が大きく見開かれた。その顔がみるみる暗く沈んだ。 不安がふくらんで、胸がざわついた。

「ほら、起きて。エリンが会いたがってるよ」

もう少し強めに揺すってみたが起きない。体をつかんで揺さぶろうとした僕の手を、エリンがぴたり

とつかんだ。 「やめて、エルドル」 「でも、みんなまだ起きないんだけど……」 「無駄よ。もう、死んでるの」

悲しみをたたえた声だった。 どこかが壊れたような、きしむ感覚がした。昨日遊び疲れて長く眠っているだけだと思っていたのに、エリンは死んだと言った。 けれど、死ぬということが何なのかわからない。

「なんで起きないの？　死んだら起きないの？」 「……」

暗かったエリンの表情がさらに硬くこわばった。僕にはまだエリンの感情をうまく読めなかったけれど、死ぬということが決してよいものではないということだけは察した。

「エリン？」 「あなたは死ぬってことがわからないの？」

僕はエリンに止められていた手を振りほどき、再び妖精たちをつんつんとつついた。僕は死が何なのかわからなかった。

「エルドル、やめて」 「死ぬって何？」 「あなた……ほんとうに何も知らないのね」

不審というよりは悲しみのこもった声だった。エリンは僕を責めなかった。僕の過ちを叱りもしなかった。ただ、僕が知らないでいることが悲しいというように感じられた。 エリンは僕を座らせ、静かに語り始めた。

「よく聞いて、エルドル。死ぬっていうのはね……」

指先に触れた妖精たちがなぜ目を覚まさないのか、説明してくれた。指先にぬくもりが感じられない理由も、もう二度と話しかけることができないという事実も教えてくれた。 死について語ってくれた。

エリンの話を聞くほどに、僕は息が詰まるような思いだった。いつの間にか子たちをつつく指も止まっていた。指先に触れる子たちの体温のように、僕も冷たくなっていく気がした。 エリンは僕と目を合わせるのをやめ、視線を森に向けた。

「そういえば……私、この森で何かが死ぬところを見たことがないの。何ひとつ」

エリンは死がないことが問題だというように言った。僕には理解できなかった。死という概念そのものを知らなかったのだ。

「枯れた木が一本もないの。木は長生きだからありえるとしても、花まで全く枯れていないのはおかしい。動物が狩りをする姿さえ見たことがない」 「それがきみの言う『常識』？」 「そう。植物は枯れてほかの植物の養分になり、動物は生きるためにほかの命を捕って食べる。本来はそういうものなの。でも……」

森を見つめていた視線が、再び僕に向けられた。僕はふと恐ろしくなった。エリンの言う死が何なのか、わかりかけた気がした。けれど認めたくなくて、あえて問い返した。

「お腹がすかないように、互いに殺すってこと？」 「うん。私が前に捕まえたフナみたいに……」

「あれは『食べる』ことだって言ったじゃない！　それがどうして『死ぬ』ことになるの！？」

思わず叫んでいた。あんなに大きな声を出したのは初めてだった。

「私が食べるためには、死ななきゃいけないから」

それでもエリンは、ぐっと抑えた落ち着いた声で答えた。 エリンの言うとおり、この森には死という概念がなかった。妖精たちがこの森で最初に死んだ存在となったのだ。 エリンが来てから起きたことだった。 森が変わり、僕も変わった。

「死ぬのは悪いこと？」 「もう二度と会えなくなるから……決していいことではないよ」 「……」

口を閉じた。特に言葉が浮かばなかった。ただ、さっきから胸の奥でくすぶっていた不安が、はっきりと正体を現した。 不安を思考で整理し、言葉にまとめた。その末にようやく口に出すことができた。

「エリン」 「何？」 「きみも……死ぬの？」

わずかな沈黙のあと、エリンは苦い笑みで答えた。

「うん。私もいつかは死ぬよ」

僕がずっと不安に思っていたのは、別れだった。 死んだらエリンにはもう会えない。ふたたびひとりぼっちで、退屈なだけだったあの時代に戻ってしまう。 そのことを直感していたからだろうか。僕は死が怖かった。同時に、この森に死を連れてきたエリンが恐ろしくなった。

「きみのせいだ！」

僕はその場を蹴って飛び出した。実体化した体を解いて、本来の姿に戻った。エリンと同じ姿でいたくなかった。エリンに見られたくもなかった。

死が降りた森にきみをひとり残して、僕は逃げ出した。

---

## 六巻　第二章

雪が降った。 いつも青々としていた森がくすんだ落ち葉を散らし、いつの間にか葉を落とした枝には白く凍った雨が積もっていた。世界がすっかり白く変わった。 これまで見たことのない景色だ。エリンが来るまでは落ち葉も雪もなかった。すべてエリンがこの森に持ち込んだものだ。 死とともに。

ひと季節が過ぎる間、僕はエリンを訪ねなかった。体を実体化することもしなかった。変わりゆく森を元に戻すために力を費やすので精一杯だった。 けれどエリンを忘れたことは一度もなかった。 ただ、あえて考えないようにしていた。 そんなある日、小さな苗木を見つけた。多くの草木が凍え死ぬ中、じっと耐えていた。よく見ると、根元に見覚えのある布が結ばれていた。エリンの服だった。

しばらく苗木に見入ってしまった。 本当はもうわかっていた。 エリンがわざとこの森に死と冬を連れてきたわけではない。そもそもエリン自身が望んでここに来たのでもなかった。死に怯えた僕が、

エリンのせいにしただけだった。

僕はすぐに体を実体化させた。久しぶりだったが、昨日やったかのようにあっという間に体ができあがった。そのままま っすぐエリンの暮らす小屋へ向かった。 過ちに気づくと同時に心配が募った。体を作ると寒さを感じた。服を裂いて苗木に結んだのなら、この寒さをどうやって凌いでいるのだろう。火の精霊だけで足りているのか不安だった。 そして寂しがっていたエリンの姿も思い出した。あの姿を見たくなくて助けようとしたのに、自分こそがエリンを孤独にしてしまった。

いつの間にかエリンの家に着いた。 申し訳なさのあまり、玄関先でしばらくたじろいだ。やっと心を決めてドアを叩いたが、何の反応もなかった。

「エリン。エリン！」 久しぶりに友の名を呼んだ。やはり返事は聞こえなかった。代わりにドアが開き、小さな火の玉がぶつぶつ言いながら出てきた。

「ご主人様は今いませんけど？」

コンロという名の精霊だった。しかも口をきいている。

「な、何？　おまえ、なんでしゃべれるの？」 「ご主人様が教えてくれたんですけど？」 「エリンが？　じゃあエリンは今、家にいないの？　どこに行ったの？」 「正確にはわかんないですけど。最近はこの時間になると毎日のように東の方に出かけてますけど」 「東……ってどっち？」 「日が昇る方向ですけど」

コンロは「それも知らないの？」という顔をした。僕の知らないことまでエリンが教えたらしい。少し悔しかったけれど、大事なのはエリンが東に向かったということだ。 僕はすぐにコンロが教えてくれた方角へ向かった。雪原にエリンの足跡が残っていた。 足跡を追いながら、エリンに会ったら何を言うべきか考えた。僕にも理由はあったけれど、どうあれ言い訳でしかない。まず謝らなければ。考えがまとまりかけた頃、エリンを見つけた。

「エリン……」 エリンは粗末な手作りの服を着て、小さな布切れを若木に巻きつけていた。そしてその傍らに、大きな狼がじっと立っていた。 エリンが手を止めて振り返った。

「エルドル？」 「エリン……」 「ちょっと待って。もう終わるから」

久しぶりに会ったエリンは、まるで昨日会ったかのように自然に応じた。僕だけが緊張していたのだと思うと、少し恥ずかしかった。もしかしたらエリンは僕に会いたくなかったのかもしれないとも思った。 それから、エリンの隣にいる狼も気になった。どこかで見覚えがある。狼は僕には目もくれず、エリンの横にじっと座っていた。 エリンは苗木に布を巻き終えると、手を払って立ち上がった。

「オーケー。これくらいで大丈夫でしょ」 「エリン。この間、僕は……」 「ちょっと待って。まだ用があるの。ちょうどよかった。ついてきて、エルドル」

エリンは僕の言葉を遮ると、僕がついてくるかどうかも確かめずに身を翻して森の奥へ入っていった。その後を狼が従い、僕はぼんやりしてからあわてて後を追った。 すぐに小さな丘に着いた。丘では子狼が何匹か走り回っていた。子狼たちはエリンと大きな狼を見るなり、喜んで駆け寄ってきた。子狼たちをなでてやったエリンは、丘の上にある小さな土盛りの前に座った。そしてその上に積もっ

た雪をそっと払った。 僕はぎこちなく立ったまま、その様子を見つめていた。エリンは土盛りに目を落としたまま言った。

「私のいた世界では、命が死んだときこうやって土に埋めて上に土をかぶせるの。人間だけがそうするんだけど、たまに人間と親しかった動物が死んだときもそうする。言葉にすると『墓』って言うの」 「墓……」

エリンはまだこちらを向かなかった。

「なぜ嘘をついたの？」 「……」

寒かった。声が冷たかった。子狼を人間に変えてしまったあのときと同じように、凍りつく感覚だった。

「ここは、あなたが人間の姿に変えてしまった子狼の墓よ。家族のもとに帰れず、ひとりで森をさまよって死んでいたの。私が最初に見つけて、ここに埋めてあげた」 「……」

僕は何も言えなかった。 エリンは空を見上げた。初めて出会ったあの日のように。灰色の雲から雪が降っていた。

「私の故郷の冬もこんなふうに寒いの。雪がどかどか降るときは地面がカチカチに凍ってね」 「あ……」 「でもそこまで困らなかったな。暖かい服もたくさんあったし、家ではヒーターをがんがんつけてたし。お母さんが手が冷たいからってカイロとかホッカイロとかいつも持たせてくれて、お父さんは野暮ったい滑り止めブーツまで買ってくれたっけ。お姉ちゃんは喜んで履いてたけど、私には無理だったなあ」

エリンの話が長くなった。聞き慣れない言葉がたくさん出てきたけれど、黙って聞いた。真っ白な息が吐き出された。

「ちょっと野暮ったくても、履けばよかった。あれを履かないって言ったときのお父さんのしょんぼりした顔が、なんでこんなに思い出されるのかな。カイロちゃんと持ったかってうるさかったお母さんのことも。お姉ちゃんは甥っ子を産む時期だって、私に買い物ばっかり頼んでたけど……今ではそれすら懐かしいよ。あはは」

かすれた笑い声がやんだ。いつの間にか雪の積もった肩が小さく震えていた。

「元気にしてるかな……会いたいな」

エリンは膝の間に顔を埋めた。それきり、エリンからの声は聞こえなくなった。 しばらくエリンはそうしていた。 そう長い時間ではなかったはずなのに、不思議と長く感じられた。

「よし、めそめそタイム終わり！　久しぶり、エルドル！　会いたかったよ！」

立ち上がったエリンは昔のように笑いながら僕を抱きしめた。僕は急な切り替えにぽかんとしたまま抱かれた。 ときどきエリンはわざと明るく振る舞った。暗い気持ちを無理やり振り払おうとするかのように。あの頃の僕はそのことに気づいていなかった。ただ、また明るく笑ってくれてうれしかった。

エリンは僕を家に連れて帰った。

僕が謝る暇も与えずに、エリンはこれまでの出来事を洪水のように語り始めた。受け身で答えるだけだった僕も、ひとつふたつと自分の話をし始めた。 その間にやったことが多かったから、話すことも山ほどあった。次第に僕の話も増えていき、いつの間にか僕たちは昔のように打ち解けておしゃべりしていた。まるで元に戻ったようだった。

ただ、外では相変わらず雪が降っていた。

---

## 六巻　第六章

光の柱からエリンが現れた場所を見つけた。 そこで僕の力と似ていながらも異質な気配を感じた。おそらくこの力のせいでエリンがここに来たのだろう。 ならばこの力を利用すれば、エリンを帰してあげられる。

エリンを帰すという考えは、かなり前から持っていた。 何とか寂しさを紛らわせてあげたいと思っていたが、子狼の墓の前で声もなく泣いていた姿を見て、決心が固まった。 もちろん帰したくない気持ちも大きかった。

エリンが現れてから、楽しくない日なんて一日もなかった。死を知ってひとりでむくれて引きこもっていたときでさえ、以前の意味のない日々に比べれば、はるかに価値があった。 それでも、エリンを帰してあげなければならない。

道のりは簡単ではなかった。 エリンと遊ぶ時間以外は、すべて研究に費やした。エリンを帰すための力の痕跡を見つけただけで、それ以外はまったく手がかりがつかめなかった。 単に願うだけでは叶わなかった。どこに帰すのか正確な座標を見つけ、そこまで送る力を集めて注ぎ込まなければならなかった。

「なんで僕がこんなことしなきゃいけないんですか？」 「僕がおまえを作ったからだ」 精霊たちも駆り出して研究を手伝わせた。ほかの子たちは言われた通りにやるのに、コンロだけはいちいちぶつぶつ文句を言った。 「ご主人様のお手伝いのために作られたんであって、エルドルさんのお手伝いのためじゃないんですけど？」 「やれと言ったらやれ」 「じゃあごはんください。ご主人様が『タダ働きは悪いことだから、必ず最低賃金は要求しなさい』って言ってたんですけど」 「……」

本当にエリンからいろいろ学んだらしい。 僕はエリンが作っていたパンを思い出し、そのまま複製して配った。この子だけにあげるわけにはいかないから他の子にも配ると、みんな張り切って研究を手伝った。単純な子たちだ。 やがて雪が溶け、森が緑を取り戻し始めた。

ついに僕は、別の世界につながる通路を開く方法を見つけ出した。 通路を開くには膨大な力が必要だった。いくら僕でも一度開けばしばらくは力の回復に専念しなければならないほどだった。どのみちエリンを帰すだけなら二度と開く必要はないから、構わない。

成功はうれしかった。けれど素直には喜べなかった。やったぞと手を取り合ってはしゃぐ精霊たちの

中で、僕はほろ苦く笑った。死を語っていたエリンの微笑みが、ようやくわかった。 少し時が流れたあと、コンロがエリンに聞いた。

「ご主人様、ご主人様。前にご主人様のいた世界には『誕生日』っていうのがあるって言ってましたよね？　自分が生まれた日が誕生日だって」 「わあ、よく覚えてるね？　うちのコンロ、かしこい！」 「えっへん。僕はご主人様に似て頭がいいんですけど。その誕生日にほかの人がお祝いだってプレゼントくれるって言ってましたよね？」 「うん。そういえばもうすぐ私の誕生日じゃない？　前に話したっけ？」 「ご主人様の誕生日に誰かがプレゼントくれたら、すごくうれしいでしょうねえ？」 「そうだね。でも言葉だけでお祝いしてくれてもうれしいよ。私の誕生日まで気にかけてくれて、コンロが一番！」

エリンはきゃっきゃと笑いながら火の精霊を抱きしめて頬をすりすりした。コンロもまんざらでもないのか、僕には見せたことのない無邪気な笑顔を浮かべた。 帰してあげると決めたくせに、切り出せずにいた僕よりもコンロのほうがずっとましだった。

エリンの誕生日が来た。意外にもそれほど迷わず、僕はエリンに誕生日の贈り物を渡した。エリンの故郷に帰る方法を見つけたと伝えたのだ。 「エルドル」

エリンが腕を上げた瞬間、思わずびくっとした。散々ぶたれてきたせいか、体が勝手に反応してしまった。その姿を見て、エリンは笑いをこらえきれなかった。

「ぷっ！　い、今まで結構叩いてたよね？　ごめんね」

謝りながら、エリンは僕をぎゅうっと抱きしめてくれた。

「そして、ありがとう」

これまでエリンに抱きしめられるたび、緊張して固まっていた。けれど今回は、僕もエリンを抱き返した。エリンは初めて会ったあの日と同じように温かかった。 僕を抱くエリンの腕がかすかに震えていた。僕の腕が震えていないのかどうか、自信がなかった。顔をうずめた肩がしっとりと湿っていく気もした。

腕の中から出てきたエリンは、泣きながら笑っていた。

「忘れないよ、エルドル。あなたとこの森、そしてみんなのこと。永遠に忘れない」 エリンはそうして旅立った。

---

## 六巻　終章

きみが去った森は、虚しかった。

いろいろな生き物を新たに作ったけれど、無駄だった。何をもってしてもきみの代わりにはならなかった。また以前の僕に戻ってしまった。 きみを帰してしまったことが悔やまれた。もしあのときに戻れるなら、絶対に帰しはしない。嘘をついてでもきみを引き止めるべきだった。

けれど悔やんでも仕方のないことだ。僕は新しい命を作ることにも飽きて、昔のようにぼんやりと空を見上げるだけだった。

そんなある日、きみの言葉を思い出した。

人間は眠る。眠ると体だけでなく心も回復する。だから疲れてつらいときは眠ってみたらいい、と。きみの言葉に従って眠ることにした。きみはいつも正しかった。

エリン。

時間はきみを消しはしないけれど、きみと過ごした痕跡は少しずつ消えてゆく。このまま眠りにつけば、僕の中のきみも消えてしまうかもしれない。 だからこうして、眠りにつく前の最後に書き記した。

もう眠らなければ。 ここで物語を終える。